



朝のこない夜はない

人の意見を聞き、
和を尊んでいきましよう

副山首 鈴木正修

「聞くはいつときの恥、聞かぬは一生の恥」ということわざがあります。

知らないことを人に聞くのは恥ずかしいものですが、その場だけのことで、一方、聞くことをためらっていると、知らないまま過ぎ、一生恥ずかしい思いをしなければならぬというのがこの意味ですが、このことわざをさらに一歩進めた前向きな教訓を千利休が残しています。




「恥を捨て、人にも問い習うべし、これぞ上手の基なりけり」

「恥ずかしいという思いなど捨てて、思い切つて聞いてみる、習つてみるのが良い。これが上達の秘訣だ」と利休は教えています。

「言い方を変えると、素直になりなさい。謙虚になりなさい」ということだと思えます。私たちが知つていいると思ひ込んでいることが、間違つていゝることも多々あります。

知つていゝる、知つていゝないにかかわらず、人の意見や話に謙虚に耳を傾けることは大事なことだと思ひます。

戦国の時代、諸国に恐れられた甲斐の武田氏は信玄没後、勝頼の代になつてから急速に衰退し、ついには滅びてしまいました。実は、勝頼は一面父信玄以上の勇将で、個々の戦いにおいては、非常な戦果をあげたことも



すく
少なくともなかったと言います。

では何故、武田氏は滅びてしまったのでしょうか。いくつか原因はあると思いますが、一番は、勝頼が老臣たちの意見を全く聞かなかったからだと思います。

あの信長、家康の連合軍を相手にした長篠の合戦の前、信玄以来の名将と言われた武田方の老臣たちは、戦いの不利なことを説いて、勝頼に何とか合戦を思い止まらせようとしたのですが、勝頼はそれを聞き入れず合戦に入った結果、戦いは一方的で、譜代の名将もほとんどが討ち死にし、勝頼自身も命からがら逃げ帰ります。この後、武田家は滅亡へと向かって行くのですが、長篠の合戦以後も勝頼は反省なく、老臣たちの諫めを入れず、長年の同盟者であった北条氏をも敵に回すことになり、老臣たちに「もは



朝のこない夜はない (209)

や武田の御家もこれまで」と言わしめたといひます。

やはり、よほどの人物以外は物事を誤り無く進めていくためには、でき
るかぎり人の意見を謙虚に聞かなければいけないと思ひます。一人の知恵
というものは、しよせんは衆知に及ばないものです。人の意見を聞かない
人はともすれば独断に陥り、誤りやすいものです。また人心も、そういう
人からは次第に離れていってしまひます。

それに対して、人の意見を聞き、和を尊んでいこうとする人は、過ちを
犯すことも少なくなり、そういう人に対しては自然と人が集まり、智慧が
集まり、信頼も集まってくると思ひます。